

中学生の学校文化に対する意識調査

田中理絵

A study of school culture for middle school students

TANAKA Rie

(Received September 27, 2013)

1. 問題の所在

本稿の目的は、学校文化に対する中学生の意識調査から、特に学校の選抜機能に関する効用への信頼について考察することである。

学校教育には、大きく3つの機能が考えられる。まず第1に、被教育者に価値や知識、技能を伝達したり態度や関心を形成するといった社会化機能、第2に、労働可能な年齢に達するまでの子どもに対して居場所を提供する機能（学校の青少年収容機能）、そして第3に、社会のさまざまな人員を選抜し、さまざまなポストに配分していく機能である（広田1997）。

学校は、未成熟な児童・生徒に対して社会に必要な知識・技能・価値・態度等を習得させるといった社会化機能をもつことは広く認識されているが、そのほかに、居場所として児童・生徒を収容する機能と社会人員の選抜・配分機能を同時に併せもつということである。近年、「居場所機能」については、不登校やいじめなどといった学校（教育）問題の解決にむけて、子どもにとって心地よく、ありのままの自分で居ることを許容されるような「居場所づくり」論がさかんに展開されているが、そうした論とは別に、そもそも学校は（児童・生徒の気持ちや心地よさなどとは無関係に）一定期間そこにいることを強制・強要する機能をもつ。また、「選抜・配分機能」については、教育学・社会学・経済学などさまざまな分野で多くの研究が蓄積されてきたものであるが、たとえば、M. W. アップル（1993）が「たとえ多くの教育者が生徒の社会的流動性を促進するよう努めたとしても、教育がおおむねこれらのより大きい社会的分業を再生産するように機能しているのが、依然、実情である」（アップル1993 8頁）と端的に指摘しているように、学校は階級分化の再生産装置として機能する側面をもつ。特に1990年代以降、子どもの家庭的な経済的・社会地位を背景に、学校教育が教育格差や階層の固定化・再生産にどのように加担しているかに注目が集まっている。逆に言えば、学校が社会的地位の配分機能に大きく荷担するからこそ、よりよい社会的ポジションを求めて早期学校段階からの熾烈な受験競争が起きるわけである。

ところが、われわれがよく知るところのこうした動機や状況は、しかしその最中にある「子どもたちにとって何であるのか」についてはあまり究明されていない。そこで本稿では、上記にあげた学校機能のなかでも特に「選抜・配分機能」について、現在、中学生がどのようにみているのかに焦点を当てることとする。

2. 学校文化

ところで、学校文化をどのように定義するかについては、論者が何を知りたいかによってわ

かれる。たとえば、耳塚（1993）は、①学校という組織・制度が普遍的にもつ性格と②各学校の歴史や社会的文脈の中でつくられた特質とに学校文化を分けた。私たちは、日本中どの学校に入っても似た構造・役割・制度等を見ることができると同時に、地理的・歴史的・人口的条件によってその学校ならではの特徴をみることもできる（田中 2012）。また、山村（2008）は、学校文化を学校のメンバーである大人（＝教師）がもつ正統な「学校大人文化」と、子ども（＝児童・生徒）が関わる「学校仲間文化」とに分けて考えた。この場合、「ある子どもは巧みに両方に適応し、他の子どもは一方に適応しても他方から落ちこぼれる。皆が同じように学校生活を楽しむのではなく、ある生徒はクラスの人気者となり、他の生徒はのけ者にされる。これらは、生得的に決まっているのではなく、直接的には、その子どもの遂行（業績達成）の結果として表れてくる」（山村 2008 247頁）。大人（教師）だから「学校大人文化」を、子ども（児童・生徒）だから「学校仲間文化」をもつのではなく、両方の文化ともが学校の中に存在しており、どれだけそれら文化項目に適応できたか（＝業績）によって地位の分化が生じるということである。あるいは、黄は、同窓会の機能に着目し、「新入生や新任教師が入る以前から、規範化され正統化されている、伝統としての学校文化が存在している」（黄 1998 iv頁）のであり、新参加者がそれら伝統（文化）を身体化する一取り入れ、変容・断絶させ、後続に継承させる一過程に着眼する。

こうした論を踏まえたうえで、本稿では「学校の選抜・配分機能」を子どもがどのようにとらえているかという意識について一特に、生徒を難関私立群と公立群とに分けて一分析していく。難関私立群は、選抜・配分機能に注目する際は、学校だけでなく家族内でもこの機能が日常的に意識されているであろう一そして、そのための競争を既に経験している一生徒群を、比較対象として設定するためである。

3. 調査の概要

- ◆調査対象：東京都、京都府、千葉・兵庫・広島県の公立中学校（4校）・私立中学校（6校）の中学2，3年生（2年生60.2%、3年生39.8%）。
- ◆調査対象校の選定方法：私立中学校は大手予備校が公開している偏差値で70前後の受験難関校を抽出、公立学校は私立校と同じ都府県内においてランダムサンプリングを行い選定した。なお、公立のうち1校は受験を課しており、都府県内でも入学が非常に難しい難関校であるため（偏差値72）、公立／私立の2群に分ける際は私立群においた。
- ◆調査方法：教室内での集団自記式による質問紙調査（一部の学校では調査日に欠席した生徒に対して、後日、個別に実施）。回収率は95.8%
- ◆調査時期：2012年6月中旬～7月下旬
- ◆有効回答数：3,162名（男子1,776名、女子1,350名、不明36名）。男子56.8%、女子43.2%（不明を除く）。

4. 分析結果

（結果1）居場所機能：

まず最初に、学校大人文化の中心業績である学業成績と自己満足度との相関についてみておこう。「今の成績に満足している」と「今の自分に満足している」という項目間の相関係数は $r=.508$ （公立 $r=.449$ 、難関私立 $r=.555$ 、 $p<.000$ ）で、正の相関が見られた。学校大人文化において、学業成績以外で望ましいとされる項目（「努力・熱心さ」「教師への従順さ」「集団協

調性の強調」「一般的学校規範）」については、表1のように、公立群が難関私立群よりも有意に肯定的であった。この結果を見ると、公立中学校の生徒の方が、向学校文化的な規範を素直に身体化しているように見える。また、難関私立群の方が成績満足度が自己満足に強く影響していたことを加えて考えると、私立群の生徒は、向学校文化的な規範を重視していない—あるいは、私立学校の中でそもそも重視されていない—と考えることもできる。

表1 向学校文化項目（t検定）

	難関私立群	公立群
努力・熱心さ		
・部活動は、一生懸命に取り組む	3.42(.799)	< 3.50(.860) **
・係活動や委員会活動をきちんとやっている	3.23(.881)	< 3.59(.704) ***
・学校行事には、熱心に取り組んでいる	3.28(.791)	< 3.54(.708) ***
・良い成績をとれるように努力する	3.13(.841)	< 3.38(.806) ***
教師への従順さ		
・先生の指示には、必ず従う	3.07(.749)	< 3.37(.726) ***
・先生には反抗しない	3.24(.790)	< 3.49(.732) ***
・悪いことを見たり聞いたりしたら、先生に報告する	2.21(.948)	< 2.94(.905) ***
・先生のすることはすべて正しい	2.07(.913)	< 2.65(.966) ***
集団協調性の強調		
・クラスの中で困ったらお互いに助け合うべきである	3.27(.781)	< 3.56(.707) ***
・何かをやりとげる時にはクラスみんなに協力する	3.14(.832)	< 3.46(.756) ***
・クラス全員と仲良くするべきである	2.94(.990)	< 3.35(.845) ***
・クラスで決めたことは守るべきである	3.31(.751)	< 3.61(.632) ***
・学校は集団で何かをすることに意味がある	2.72(.892)	< 2.84(.949) ***
一般的学校規範		
・いじめをしてはいけない	3.70(.633)	< 3.86(.417) ***
・学校をずる休みしてはいけない	3.57(.721)	< 3.68(.623) ***
・校則は必ず守る	3.14(.850)	< 3.55(.669) ***

表内の数値は平均値、()内はSD。 *** p < .001、** p < .01、* p < .05

そこで次に、公立群と難関私立群それぞれのなかで、向学校文化項目を高／低群に分けて、その関係に注目した（公立×向学校高群、公立×向学校低群、私立×向学校高群、私立×向学校低群の4群）。なお、ここで取り上げた項目は、「学校は居場所である」（居場所機能）、「一流大学に行かないといけない」「将来、会社や社会でリーダー的地位に就くと思う」（選抜・配分機能）である（表2）。その結果、向学校文化（「努力・熱心さ」「教師への従順さ」「集団協調性の強調」）の高群は公立群・難関私立群ともに、低群に比べて、学校を居場所であると感じていることがわかる（居場所機能）。しかし一方で、「一流大学に行かなければならない」といった学校の選抜・配分機能については、公立群とは異なり、難関私立群の中学生は—学校行事に熱心に取り組もうが取り組まなかろうが、向学校文化項目に沿った行動を取ろうが取るまいが、あるいは同級生や友だちと助け合っても助け合わなくても—目標とすべき項目である

表2 向学校文化項目（高低群）と居場所感・将来展望

（私立／公立群別）

		努力・熱心さ (%)			
		高群	低群	N	
学校は居場所である	私立	56.9	39.0	838	$\chi^2=56.42, df=1^{***}$
	公立	55.5	30.2	600	$\chi^2=70.44, df=1^{***}$
一流大学に行かないといけない	私立	47.6	45.3	822	$\chi^2=0.973, df=1 \text{ n.s.}$
	公立	23.0	14.0	256	$\chi^2=13.89, df=1^{***}$
将来、会社や社会でリーダー的地位に就くと思う	私立	28.9	19.1	415	$\chi^2=23.28, df=1^{***}$
	公立	25.1	12.9	268	$\chi^2=24.11, df=1^{***}$
		教師への従順さ (%)			
		高群	低群	N	
学校は居場所である	私立	54.4	42.7	833	$\chi^2=22.83, df=1^{***}$
	公立	52.9	35.6	596	$\chi^2=32.64, df=1^{***}$
一流大学に行かないといけない	私立	50.8	43.7	824	$\chi^2=8.253, df=1^{**}$
	公立	23.4	13.1	254	$\chi^2=18.30, df=1^{***}$
将来、会社や社会でリーダー的地位に就くと思う	私立	24.5	23.2	417	$\chi^2=0.367, df=1 \text{ n.s.}$
	公立	23.7	15.9	267	$\chi^2=10.12, df=1^{**}$
		集団協調性の強調 (%)			
		高群	低群	N	
学校は居場所である	私立	62.7	37.1	833	$\chi^2=111.03, df=1^{***}$
	公立	57.1	30.3	597	$\chi^2=85.43, df=1^{***}$
一流大学に行かないといけない	私立	46.2	46.0	815	$\chi^2=0.006, df=1 \text{ n.s.}$
	公立	21.2	17.9	254	$\chi^2=2.02, df=1^\dagger$
将来、会社や社会でリーダー的地位に就くと思う	私立	29.6	20.0	417	$\chi^2=21.30, df=1^{***}$
	公立	25.7	13.1	266	$\chi^2=28.12, df=1^{***}$

※数値は「はい」と答えた生徒の%を示す。

*** $p < .001$ 、** $p < .01$ 、 $^\dagger p < .1$

ことがわかる。

ところで、中学生にとって学校は必ずしも居心地のよい場所とは限らない。本調査でも、「陰口を言われているような気がする」(49.9%；公立57.4%>難関私立44.6%、 $p < .000$)、「友だちにからかわれたり、バカにされたりすることがある」(57.1%；公立60.1%>難関私立54.9%、 $p < .000$)、「授業がよくわからないことが多い」(43.7%；公立55.4%>難関私立35.4%、 $p < .000$)、「友だちに嫌なことをされることがある」(42.2%；公立45.4%>難関私立40.1%、 $p < .000$)、「勉強について行けないのではないかと不安になる」(58.6%；公立64.6%>難関私立54.4%、 $p < .000$)といった結果がみられた。よって、学校に行くこと自体に対する疑問が生じることもままあるが、公立群と難関私立群とで比較すると公立群がその割合は高い(表3)。私立群は、既に受験を経ているので、中学校入学前に志望や動機が強められたことが1つの要因として考えられるだろう。

あるいは、自己満足度が低い群の方が、高群と比べて、学校へいくことに疑問を感じるということがわかる(表4)。ただし、学業成績満足度と学校に行くことの疑問の間に関連はみられなかつ

表3 なぜ学校に行くのか悩んだことがある % (人数、以下同様)

	とても 当てはまる	だいたい 当てはまる	余り当て はまらない	全く当て はまらない	計	
難関私立	16.1	17.6	28.6	37.7	100.0(1,810)	$\chi^2 = 33.957$ df = 3 p < .000***
公立	22.1	21.0	27.3	29.6	100.0(1,296)	
計	18.6	19.0	28.1	34.3	100.0(3,106)	

表4 自己満足度と学校へ行くことの疑問 (%)

		なぜ学校に行くのか悩んだことがある			$\chi^2 = 8.435$ df = 1 p < .01
		はい	いいえ	計	
今の自分に 満足している	はい	33.6	66.4	100.0 (853)	
	いいえ	39.3	60.7	100.0 (2,223)	

「はい」…とても当てはまる+だいたい当てはまる、「いいえ」…全く当てはまらない+あまり当てはまらない

表5 成績満足度と学校へ行くことの疑問 (%)

		なぜ学校に行くのか悩んだことがある			n.s.
		はい	いいえ	計	
今の自分に 満足している	はい	38.7	61.3	100.0 (781)	
	いいえ	37.3	62.7	100.0 (2,309)	

「はい」…とても当てはまる+だいたい当てはまる、「いいえ」…全く当てはまらない+あまり当てはまらない

た(表5)。

(結果2)

次に、主に表6の〔II〕を参照しながら、学校教育の選抜・配分機能に関する意識についてみていこう。t検定を行った結果、難関私立群の方が公立群の生徒に比べて、「現代は学歴社会」であり「一流大学に行かないといけない」と考え、「自分は将来、会社や社会でリーダー的地位に就くと思う」などエリート予備軍の意識が高い。これは先に見た表2の結果と合致している。また、「親から認められている」ことや「親の期待」を感じているのも難関私立群の方が有意に高い。

しかし一方で、教師との関係に注目すると、「担任の先生は私のことをわかってくれる」「担任の先生は困ったときに助けてくれる」といった教師への親和意識は公立群の方が高く(表6〔I〕)、私立群は「先生は本当の自分を知らない」(表6〔II〕)など教師と距離を取っている姿が浮かぶ。また、「場面に応じて振る舞い方を変えている」「時には嘘をつくことも大切だ」など対人場面で戦略的な自己表出の必要性を述べているのも難関私立群の方である。

さて、ここで注目したいのが表6の〔IV〕の項目である。「学校は居場所である」「クラスになじんでいる」「クラスの人気者である」「高学歴だからといって幸せになるとは限らない」「必ずしも学校に行く必要はない」といった項目については、いずれも検定の結果、有意差がみられなかった点を考えると、つまりこれら項目は学校のタイプによって差が生じるわけではなく、多くの中学校において見受けられる共通する性格である可能性が指摘できる。

表6 学校文化項目 (t検定)

	難関私立群	公立群
〔I〕		
・良い成績を取れば、良い大人になれる	2.23 (.913) <	2.53 (.956) ***
・学校の成績と仕事の能力は関係すると思う	2.53 (.913) <	2.73 (.967) ***
・決めたことは最後までやり遂げる	2.70 (.879) <	2.83 (.974) ***
・友だちとよい関係をつくることができる	2.85 (.794) <	2.99 (.882) ***
・スポーツができる	2.25 (.914) <	2.49 (.967) ***
・担任の先生は私のことをわかってくれる	2.50 (.857) <	2.63 (.928) ***
・担任の先生は困ったときに助けてくれる	2.44 (.861) <	2.74 (.914) ***
・友だちはたくさんいた方がよい	3.26 (.868) <	3.37 (.901) ***
・係活動や委員会活動のように学校の中で自分の役割があると安心する	2.59 (.931) <	2.85 (.975) ***
〔II〕		
・勉強は楽しい	2.20 (.972) >	1.98 (.973) ***
・親は自分に期待している	2.49 (.956) >	2.36 (.997) ***
・親から自分は認められている	2.60 (.930) >	2.50 (.969) **
・先生は本当の自分を知らない	2.74 (.936) >	2.61 (.978) ***
・時には嘘をつくことも大切だ	3.35 (.728) >	3.16 (.877) ***
・場面に応じて振る舞い方を変えている	3.08 (.828) >	2.94 (.937) ***
・現代は学歴社会だと思う	2.90 (.955) >	2.62 (1.026) ***
・マスメディアで報道されるいじめや不登校の問題は実際とはだいぶ違うと思う	2.96 (.913) >	2.88 (.966) *
・一流大学に行かないといけな	2.39 (1.006) >	1.76 (.963) ***
・自分は将来会社や社会でリーダー的地位に就くと思う	2.05 (.808) >	1.97 (.852) *
・先生から優等生を思われている	2.05 (.808) >	1.97 (.852) *
・今の自分に満足している	2.03 (.891) >	1.96 (.916) *
・自分のことが好きだ	2.28 (.950) >	2.12 (.984) ***
〔III〕		
・親は自分のことをわかってくれない	1.64 (.803) <	1.76 (.858) ***
・自分は誰からも必要とされていない人間だ	1.96 (.811) <	2.14 (.879) ***
・できることなら生まれ変わりたい	2.39 (1.130) <	2.71 (1.147) ***
・親に言われるから勉強をしている	2.12 (.921) <	2.34 (1.024) ***
・陰口を言われているような気がする	2.47 (.921) <	2.72 (.975) ***
・友達にからかわれたりバカにされたりすることがある	2.64 (.911) <	2.75 (.982) ***
・勉強がよくわからない	2.64 (.921) <	2.95 (.961) ***
〔IV〕		
・学校は自分の居場所である	2.46 (.882)	2.44 (.959) n.s.
・クラスになじんでいる	2.92 (.790)	2.92 (.896) n.s.
・クラスの人気者である	1.94 (.758)	1.99 (.811) n.s.
・高学歴だからといって幸せになれるとは限らない	3.30 (.828)	3.30 (.879) n.s.
・必ずしも学校に行く必要はない	2.14 (.988)	2.12 (1.004) n.s.
・今の成績に満足している	2.00 (.826)	2.01 (.842) n.s.

表内の数値は平均値、()内はSD。 ***p < .001、**p < .01、*p < .05

また、「よい成績を取ればよい大人になる」あるいは「学校の成績と仕事の能力は関連する」などのように、学校の社会化機能の効用を信じているのは公立群の生徒である（難関私立群＜公立群、表6〔I〕）。

以上より、公立群と比較して難関私立群の生徒は、学校の選抜・配分機能は（とりあえず）信用するものの、だからといって、必ずしも学校で得られた知識や態度が社会で通用するわけではないと考えていることがわかる。ただし、私立群（公立群）の内部をさらに向学校文化の高群と低群に分けると、向学校文化高群の方が低群よりも有意に学校の社会化機能の効用を信じている結果がでた（表7）。

表7 向学校文化項目（高低群）と学校社会化機能の信用 (私立／公立群別)

		努力・熱心さ (%)			
		高群	低群	N	
よい成績を取ればよい大人になる	私立	41.6	33.7	667	$\chi^2=11.87, df=1$ ***
	公立	55.5	38.0	641	$\chi^2=33.72, df=1$ ***
学校の成績と仕事の能力は関連する	私立	58.3	48.9	942	$\chi^2=15.62, df=1$ ***
	公立	66.0	53.3	779	$\chi^2=18.73, df=1$ ***
		教師への従順さ (%)			
		高群	低群	N	
よい成績を取ればよい大人になる	私立	51.0	29.6	671	$\chi^2=81.69, df=1$ ***
	公立	57.5	34.8	642	$\chi^2=57.85, df=1$ ***
学校の成績と仕事の能力は関連する	私立	60.8	48.6	942	$\chi^2=24.56, df=1$ ***
	公立	67.7	50.5	779	$\chi^2=34.29, df=1$ ***
		集団協調性の強調 (%)			
		高群	低群	N	
学校は居場所である	私立	42.7	34.1	666	$\chi^2=13.64, df=1$ ***
	公立	57.0	38.3	638	$\chi^2=41.68, df=1$ ***
学校の成績と仕事の能力は関連する	私立	58.5	48.9	930	$\chi^2=15.75, df=1$ ***
	公立	66.8	52.8	777	$\chi^2=24.76, df=1$ ***

※数値は「はい」と答えた生徒の%を示す。

5. 研究のまとめと今後の課題

本稿では、中学生の学校文化に対する意識調査を通して、生徒たちがどのように学校教育の効用を考えているのかについて明らかにしようと試みた。その結果、a) 難関私立群／公立群など学校タイプによって特徴に差がみられること、またさらに、b) 各群内（難関私立学校内／公立学校内）で学校文化項目への適応度で生徒群を比較研究できることがわかった。したがって、中学生の学校文化研究では、そうした複層的な考察が必要であるといえるだろう。従来の研究では、私立群と公立群の比較といった単層的な分析が多かったが、それだけでは不十分である可能性が指摘できる。学歴の効用の変容が指摘されているなかで、実際に生徒たちがどういった意識を持って学校文化および学校教育の効用を捉えて、実際に行動しているのかについ

て今後さらなる実証研究の蓄積が求められていくが、その際に、複層的分析が進められることが求められると考える。

<引用・参考文献>

- ・アップル, M. W.・長尾彰・池田寛1993『学校文化への挑戦』東信堂
- ・黄順姫1998『日本のエリート校校—学校文化と同窓会の社会史』世界思想社
- ・広田照幸1997『陸軍将校の教育社会史』世織書房
- ・耳塚寛明1993「学校文化」『新社会学辞典』有斐閣
- ・田中理絵2011「児童生徒集団の構造」住田正樹・岡崎友典編著『児童・生徒指導の理論と実践』第6章、放送大学教育振興会
- ・山村賢明2008『社会化の理論』世織書房